

歌末表現における四三調忌避の影響について

——万葉集と八代集を比較する——

坂野 信彦

一

平安時代のはじめころから、明治時代の中ごろにいたるまで、和歌の結句にはひとつのしきたりがあった。結句（七音）は三音めか五音めで切つて読むことのできる表現構成でなければならぬ、というものである。このことについては、すでにいくつかの拙論で指摘してきた。⁽¹⁾念のため、いまいちど確認しておこう。

結句はつぎのように三音めか五音めで切れなければならなかった。

○○○—○○○
○○○○—○○

いっぽう、三音めでも五音めでも切れない表現構成は忌避された。三音めでも五音めでも切れないということは、四音めで切れるということである。（二音めで切れる構成のばあいも、四音めでさらに切れるかどうかが問題であった。）

○○○○—○○○

このように四音めで切れてしまふかたちのものを「四三調」とよぶことにする（この「四三調」の概念は斎藤茂吉の論文「短歌に於ける四三調の結句」⁽²⁾におけるそれとほぼ同様のものである）。

『万葉集』では、結句の表現構成に特別な制約があるようにみえうけられない。四音めで切つて読める結句も頻出する。たとえば巻一の冒頭五首の結句をみてみる。三首めの結句は五音なので省く。のこり四例について、四音めのあとに仕切りの線を引いてみる。

いへをも一なをも（家呼毛名雄母）

やまとの—くには（八間跡能國者）

そのくさ—ふかの（其草深野）

あがした—ごころ（吾下情）

四句とも支障なく読める。ただし「くさ—ふかの」「した—ごころ」というところにはやや不自然さを感じるかもしれない。それは二音めのあとの区切れのほうに優勢であるからである。しかしここでは優劣は問題でない。切れるか切れないかだけを問題にする。二音めほどでないにしても、四音めでも切れる。むろんこれにはれっきとした語構成上の根拠があるわけである。これらの句は、三音めや五音めで切つて読むことはけつしてできない。

ところが、平安時代以降に作られた和歌では事情がちがつてくる。たとえば元久元年（一二〇四）におこなわれた「北野宮歌合」をみる。ここには後鳥羽院や定家の作品三〇首がならぶ。三〇首の結句全部について、やはり四音めのあとに仕切り線を引いてみる。

あらしふ—くなる とふしぐ—れかな よはのき—ごろも
 そらもう—きころ いくめぐ—れとも しぐれふ—るころ
 そでのう—へかな みねのう—れぐも ふりわく—るなり
 つきぞや—どれる おもひき—えなむ あまとこ—たへん
 いろにい—でめや よひのか—よひぢ ゆきなや—みつ
 まつのゆ—ふかぜ うちもい—でねば しるひと—もなし
 つゆきえ—ぬとも そらにま—がへむ あきのゆ—ふぐれ
 みちやま—どはむ むすぼほ—れつつ そでにき—えつつ
 やまのか—けはし そでをま—かせて みねのし—らくも
 つきはい—づらむ さやのな—かやま ふくあら—しかな

全例、四音めで切って読むことは不可能である。これらはすべて、かならず三音めか五音めで切って読むように構成されているのである。四音めで切れる構成の結句が忌避されていたことは明白である。

古今集以降、じっさいに四三調がどれほどの頻度で出現していたかを表にしてみよう。(ただし、まれに「切れる」「切れない」の判定の微妙なケースもあるので、数値に小さな誤差の生じることもある。)

四三調	非四三調	古今拾遺後拾新古
55 (5%)	1045 (95%)	古
25 (2%)	1326 (98%)	今
12 (1%)	1206 (99%)	拾
11 (0.6%)	1967 (99.4%)	遺
		後
		拾
		新
		古

カッコ内は歌集全体のなかでの比率を示す。「非四三調」には三・四構成のもの、五・二構成のもの、それに二・五(三・二)構成のものがふくまれる。もし結句の音数構成になんらの規制も偏好も存在していないのであれば、四三調の出現率は二〇〇三〇〇になるはずである。事実、万葉集では各巻ともそのていどの出現率となっているようである(たとえば巻五は二〇〇%、巻一四は二三%、巻二〇は二二%といったぐあいである)。

この表をみると、古今集以降一貫して四三調結句が減少していったことがわかる。二十一代集最後の新統古今集にいたってはさらに〇・三%にまで減少してしまう。

さて、和歌の結句にこのようなしきたりが存在していたのであれば、結句の表現はそれによっておのずから大きな影響を受けざるをえない。四音めで切れるということは、句末に三音のまとまりをのこすということである。それが忌避されたということは、句末では三音でまとまりをもつような語句の使用を避けなければならなかったということの意味する。

本稿では、四三調の忌避が結句の表現におよぼした影響の一端を、おもに万葉集と八代集との比較において、かいまみてみようとするものである。

二

まず、もつとも単純で顕著な例として、体言止めについてみてみよう。一般に日本語の名詞には二音・四音のものが多くから、和歌の体言止めにおいても二音・四音の名詞で終止するものがおのずから多くなる。それでも万葉集には、偶数音節の体言止めにまじって、三音の名詞で終止するものもかなり多くみいだされる。「わぎ

も」「思ほせ吾妹」など一五例)、「わがせ」「恋しき我が背」など一二例)、「ところ」「大宮ところ」など九例)、「をとこ」「月人壮士」など五例)。これらは集中の体言止めベスト・テンにランクされる(ちなみにトップは「きみ」の一七例)。ほかに「をとめ」「ころも」「をぶね」「やつこ」「わぎへ」「こすげ」「よひと」「をぎと」「よごと」など。

ところが、平安時代になると、このような三音の名詞で終止する結句はいっせいに姿を消してしまう。わずかに古今集に「棚なし小舟」という結句が一例みられるのみである。これは「大歌所御歌」の「しはつ山ぶり」として収載されているもので、万葉集の黒人の歌が伝承されたものである。このばあいには古体そのままであることがかえって望ましかったのであろうか。これ以外には、三音語による体言止めは八代集に一例もみられないのである。三音語による体言止めを意識的に避けていたとしか考えられまい。

三音の体言をすべて避ける——これは結句の表現に大きな制約をもたらさずにはおかない。それをおしてまであえて三音語の使用を拒みつけた理由は何であろう。そこには、よくよく強固な禁忌が存在していなければならないだろう。三音語による体言止めの欠如は、四三調忌避の影響をもっとも明確に示すものである。

なお平安時代以降は、とうぜんながら、三音の名詞を避けるための工夫がなされたはずである。たとえば、「ころも」という三音語に代えて「きぬ」という二音語を用いる。万葉集には「しろきあさごろも」という結句があったが、拾遺集ではその伝承歌の結句を「しろきあさぎぬ」としている。「ころも」という語をどうしても歌末に据えたいというばあいはどうしただろうか。「ころも」のあたりに一音つけたして、「さごろも」とか「けごろも」、「はごろ

も」とする。こうした手立てがさまざま講じられていたものと思われる。

動詞に目を移してみよう。「まさる」という動詞がある。万葉集では、「わが恋まさる」「恋こそまされ」など、結句末に「まさる」もしくは「まされ」を用いたものが一一例みられる。これにたいして八代集には、そのような結句は一例もない。ただし「まさるわがこひ」という結句は古今集と拾遺集に一例ずつみいだされる(万葉集には用例がない)。「まさる／わがこひ」は四・三構成の「わがこひ／まさる」を転倒させて三・四構成にしたかたちである。これなら四三調忌避の時代にも適合するわけである。「まさる」の用例も、四三調忌避の影響を受けたものであること確実であろう。

「きこゆ」という動詞。万葉集には、「楫の音きこゆ」「をちこちきこゆ」という結句が五例みられる。ところが八代集には、そのようなかたちの結句は一例もない。そのかわりに、「をとぞきこゆる」「そらにきこゆる」のように「きこゆる」で終わるかたちの結句が一一例みいだされる(万葉集には用例なし)。これなら三・四構成であるから問題ないわけである。「きこゆ」の用例も、四三調の忌避によるものであること確実であろう。

「ながる」という動詞。万葉集には、「なみだしながる」「あわゆきながる」という例がみられる。しかし八代集にはこのような結句は一例もない。そのかわりに、「月ぞながるる」「水ぞながるる」といった結句が五例みいだされる。これもやはり三・四構成となつて具合がよい。「ながる」のばあいも四三調忌避の影響は確実であろう。

先の「をとぞきこゆる」もそうであるが、こうした「ぞく動詞連体形」というかたちの係結び構文は、四三調忌避への対応を第一の

目的として頻用されたものとみられる。

「わたる」という動詞。万葉集では、「雁鳴きわたる」「あが恋ひわたる」のように、「わたる」もしくは「わたれ」で終結するものが二六例みられる。たいして八代集では、古今集に二例、新古今集に一例みられるのみである。古今集の二例は「もえこそわたれ」「たづ鳴きわたる」でともに「よみ人しらず」、新古今集の一例は「たづ鳴きわたる」で聖武天皇の作とされている。「たづ鳴きわたる」は、当時、万葉調のいかにも古風な表現であつただろう。

つぎに、二音の動詞や名詞に助詞のついたかたちをみてみる。

動詞「鳴く」に助詞「も」のついた「鳴くも」のばあい。万葉集には、「うぐひすなくも」という結句が九例みられる。しかるに八代集には一例もない。そのかわりに、「うぐひすぞなく」というかたちの結句が古今集に二例ある。「うぐひすぞ／なく」は五・二構成であるから四三調忌避の時代に適合する。

「見れば」のばあい。万葉集には「色づくみれば」というかたちの結句が一二例みられる。八代集には一例もみられない。これについて四三調忌避以外の理由を何か考えることができるだろうか。

「待たむ」のばあい。万葉集には「いつとかまたむ」という結句が八例みられる。八代集では古今集に一例（よみ人しらず）みられるのみである。

形容詞「惜し」に「も」のついた「惜しも」のばあい。万葉集には「散らまくをしも」という結句が一〇例みられる。しかし八代集には一例もない。そのかわりに「名こそをしけれ」というかたちの結句が一一例みられる。「をしけれ」というかたちにすれば三・四構成になるからであろう。

形容詞「なし」に助詞「に」のついた「なしに」のばあい。万葉

集には、「みる人なしに」「逢ふとはなしに」といった結句が二四例みられる。たいして八代集では、古今集と拾遺集に一例ずつあるのみで、しかもそのどちらも「よみ人しらず」である。

三

つぎに助動詞・助詞およびそれらの複合形の例をみてみよう。

まず、「ごとし」のばあい。万葉集には「あひ見るごとし」というかたちの結句が一〇例みられる。ところが八代集には一例もみられない。ただし「ふる雨のごと」というかたちの結句は五例みられる。「ふるあめの／ごと」は五・二構成であるから四三調忌避の時代に適合する。このばあいも四三調忌避の影響は確実といえよう。

「までに」のばあい。万葉集では、「万代までに」「すべなきまでに」というかたちの結句が三八例みられる。たいして八代集では、古今集に三例、拾遺集と金葉集に一例ずつあるのみである。（このうち二例は「逢はん日までに」「末の世までに」で、これらは「逢はん／日までに」「末の／世までに」と切つて読んだものと思われる。）

「らしも」のばあい。万葉集では「春立つらしも」というかたちの結句が一〇例みられる。が、八代集には一例もみられない。

「らくは」のばあい。万葉集では「あが恋ふらくは」というかたちの結句が二三例みられる。が、八代集にはわずかに一例、新古今集に「わが恋ふらくは」とあるもののみである。しかもこの一例は万葉集巻十一にある歌の伝承形で、「人麿」作となっている。

「なくに」のばあい。この「なくに」とつぎにとりあげる「ものを」は、平安時代に入ってからもあるていどの頻度で用いられ、四三調結句の出現に一定の比率をもたっていた。「なくに」の用い

られかたについては、すでに調査がなされている。吉田金彦氏は、万葉集、古今集、後撰集、拾遺集、新古今集における「なくに」の使用度数を、「文中用法」と「文末用法」とに分けて調査した。氏は言う。「なくに」の用法は、平安時代以後一変する。『万葉』で文末用法を主力として愛用された『なくに』は、時代と共に衰亡し、使われても文中用法に移行しているのである⁽³⁾。わたし自身がおこなった同様の調査によれば、「なくに」の使用状況はつぎのごとくである。

	歌 中	歌 末
万 葉	37 (0.8%)	113 (2.5%)
古 今	18 (1.6%)	16 (1.5%)
拾 遺	11 (0.8%)	5 (0.4%)
後 拾	2 (0.2%)	1 (0.1%)
新 古	4 (0.2%)	0 (0%)

カッコ内は歌集全体のなかでの出現率である。万葉集では、「名草山言にしありけり我が恋ふる千重の一重も慰めなくに」のように歌末に「なくに」を用いた例がたいへん多い。いっぽう、「いちしろくしぐれの雨は降らなくに大城の山は色づきにけり」のように歌中で用いた例も少なくない。が、両者の度数を比較すれば、歌末に用いた例のほうが圧倒的に多い。ところが平安時代になると、その歌末での使用が急激に減少する。それでいて歌中での使用はむしろいったん増加している。古今集の歌中用例「18」というのは、総歌数の一・六％で、これは万葉集の二倍になる。表に出ていない後撰集は一・二％。拾遺集の「11」という数値でちょうど万葉集となら

ぶ。こうしてみると、単純に「なくに」の使用そのものが減少していったわけではないことがわかる。すなわち、まず歌末での使用が急激に減少し、しかるのちにそれに引っぱられるようにして歌中での使用も減少していったことになる。万葉集から新古今集にいたるこうした推移を、いったいどのような因果関係によって説明できるであろうか。四三調の忌避というモメントを抜きにしてこの問題を解くことはできないのではなからうか。

「なくに」とならんで例外的に四三調結句を一定比率もたらしていた「ものを」のばあい。やはり「早来ても見てましものを山背の多賀の槻群散りにけるかも」のように歌中に用いられたものと「富士の嶺を高み畏み天雲もい行きはばかりたなびくものを」のように歌末に用いられたものとに分けて、調査結果を表にして示してみよう。

	歌 中	歌 末
万 葉	70 (1.5%)	67 (1.5%)
古 今	12 (1.1%)	23 (2.1%)
拾 遺	16 (1.2%)	5 (0.4%)
後 拾	25 (2.1%)	10 (0.8%)
新 古	26 (1.3%)	8 (0.4%)

「なくに」にまして複雑な様相を呈しているようにみえる。しかし総体的にみると、古今集の歌末での用例が一時的に増加したことを除けば、歌末での用例の減少ということが基本的な流れとなつていえるといえよう。歌集の総歌数との比率でみれば、万葉集の歌末が一・五％、新古今集の歌末が〇・四％。(新古今集では四三調結句

そのものが一例だけで、そのうちの八例までが「ものを」の使用によるということになる。新続古今集ではこれが〇・一％にまで減少する。もつとも歌中での比率も減少しているから、けつきよく「なくに」のばあいと同様の推移をたどって行ったことになろう。こうした推移の要因もまた、やはり四三調忌避を措いては考えられまい。

ただ、古今集で歌末の用例がいったん増えたことについてはどう考えればよいであろうか。思うに、四三調の忌避がまだじゅうぶんに確立していなかったところに、「ものを」で歌いおさめることがあるていど流行したのではなからうか。小沢正夫編の『作者別年代順古今和歌集』によつて調べてみると、第三期（撰者時代）における歌末の「ものを」の出現率は一・五％。これにたいして、第一、二期および「よみ人しらず」における出現率は二・六％である。平安時代の初期に、「ものを」による歌いおさめがいくらか好まれた形跡がうかがわれる。

「ましを」のばあい。これも一覧表にしてみる。

歌 末	歌 中	
38 (0.8%)	21 (0.5%)	万 葉
6 (0.5%)	2 (0.2%)	古 今
3 (0.2%)	0 (0%)	拾 遺
0 (0%)	0 (0%)	後 拾
0 (0%)	0 (0%)	新 古

使用度数をみると古今集で急激に減少したようにみえるが、出現率をみるとそれほどでないことがわかる。歌中、歌末ともに、き

いに〇・三％ずつ低落しているのである。歌中での使用のほうがもともと万葉集ですくなかったぶん、歌末よりも早くゼロに達している。後拾遺集、新古今集の「0」の背景として、四三調の忌避が影響している可能性もある。が、いまはここは無関係とみておこう。

「ならむ」と「なるらむ」について。「なるらむ」は平安時代以降の語法である。わたしの調査では、「なるらめ」というかたちのものもふくめて、万葉集にゼロ、古今集に五例、拾遺集に二七例、後拾遺集に二五例、金葉集と詞華集に各一例、新古今集に二二例。新続古今集には四四例。金葉集と詞華集の二例以外はいずれも歌末に用いられている。散文での使用は源氏物語以降という。⁽⁴⁾「なるらむ」は、古今集時代に主として歌末語法として使われだしたということになる。その「なるらむ」と意味的にも構文的にも差異の認められないのが「ならむ」である。

「ならむ」は上代においてすでに用いられていた。万葉集では、詞書でも歌中でも用いられていた。八代集では、短歌のとくに第三句を中心に「ならむ」はかなり多く見いだされる。新古今集の一三例をはじめとして、五三例をかぞえる。「なるらむ」が歌末語法として用いられたのなら、それと差異のない「ならむ」も同様に用いられておかしくない。上接語の音数によつて四音の「なるらむ」と三音の「ならむ」を使い分ければ便利なはずである。ところが、八代集の歌末には「ならむ」はほとんどでてこないものである。わずかに後撰集、後拾遺集、千載集に一例ずつみられるのみである。しかもその三例は、「玉の緒ならむ」「冬の夜ならむ」「秋の戸ならむ」と、いずれも三音めでいったん切れるかたちをなしている。したがってこれらは、「玉の／緒ならむ」というふうに三四調に読んだものと考えられる。

つまり、「ならむ」は、三四調の結句を構成しうるばあいをのぞいて、歌末にはいっさい使用されなかったということになる。これにたいして「なるらむ」は、歌末に用いられれば自動的に三四調を構成するゆえに、四三調忌避の時代における歌末専用の語法として使われるようになったのではないだろうか。

自動的に三四調を構成するという点で同様な歌末表現に、「なりけり」がある。万葉集にはわずかに二例をみるのみであるが、平安時代に入ってからにわかに頻用されるようになる。「なりける」「なりけれ」をふくめて、古今集に三六例、後撰集に五四例など、八代集に平均三・八%の出現率をみる。これは万葉集の約百倍に相当する。これも四三調の忌避という背景があつてのことではなからうか。

「もがも」という歌末表現は、万葉集に四四例みられる。この「もがも」が、「もが」プラス「も」であつたことは、「つるぎ太刀もが」のように「もが」単独でも使われていたことで明らかである（「万代にもが」のようにも使われた）。ところが平安時代になると、これは「も」プラス「がも」と分けられるかたちに受けとられたようである。四三調にならないように読もうとした結果であろう。ただし「がも」は、「かも」と同様、平安朝のひとたちには受けいがたい性質のものであつたようで、これを「がな」に代えて用いた。すなわち「も・がな」の成立である。「ともがな」「てしがな」といったかたちのものをふくめ、古今集に七例、後撰集に一七例などの用例をみる。「もが・も」から「も・がな」への変化は、その背景に四三調の忌避というしきたりを考慮しなければならぬだろう。なお、八代集にも一例だけ「ぬくものにもが」という結句をもつ歌がある（後撰集）。「よみ人しらず」となっているが、じつは万葉集の家持の作と同一の歌である。

おわりに

以上、四三調の忌避という観点から、歌末表現の諸相を観察してみた。四三調結句のタブーは明白であり、平安朝以降の歌末表現がそのタブーに深く影響されていたことも否定できないだろう。

むろん、本稿でとりあげた歌末表現のすべてにおいて四三調忌避の影響が絶対的であつたと主張するつもりはない。なかには時代の推移による言語体系や言語感覚の変化というモメントの関与していた例もあるだろう。しかし、ほとんどのばあい、四三調忌避の影響をぬきにしてその用例の変容を説明することは不可能であろう。

四三調忌避の影響は、結句表現の全般にわたっているはずである。本稿でとりあげたものの以外にも、さまざまなかたちの影響を結句は受けてきたはずである。今後さらに詳細な研究が展開されなければならぬ。

四三調の忌避は、明治時代の中ごろにいたって消滅する。タブーの消滅は、歌末表現にまた新たな変容をもたらさずにはおかない。近代短歌におけるこの変容についても、今後多くの研究がなされてしかるべきであろう。

注

- (1) 「王朝和歌の律読法——単独母音を手がかりに——」（岩波書店『文学』五三巻六号、昭和六〇年六月）、「結句の和歌史」（『上田女子短期大学紀要』一五号、平成四年三月）ほか。

- (2) 「余がここに分類せむとするは純粹の四三調の結句のみならず二三調又は二五調にてもその終りの三音独立したる感ある時——『玉敷かましを』の如き——は同じく四三調に分類し七

音よりなる名詞にても『ツキヒトラトコ』の如きは同様に分類せり、又助動詞等の中にてかかる感じあるものも亦然り。」(斎藤茂吉「短歌に於ける四三調の結句」明治四十二年一月)

(3) 吉田金彦『上代語助動詞の史的研究』(明治書院、昭和四十八年)

(4) 糸井通浩「助動詞の複合『ならむ』『なるらむ』——散文体と韻文体と——」(国語語彙史研究会『国語語彙史の研究』一一、平成二年一二月)

なお、本研究にさいして遠藤嘉基監修・古典談話会編『萬葉集八代集歌末語索引』(洛文社)を活用させていただいた。